

博士学位論文要旨

架空のものそして風景

—「割れ」の芸術表現とガラス素材の可能性を中心に—

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
美術専攻工芸研究領域

袁 方洲

本論文は、「架空のものそして風景」を制作テーマとして、「割れ」という現象とガラス素材の関係性を見つめ直すことを論じるものである。筆者はガラスの焼成過程で、素材の変質や重力といった自然条件により生まれる偶然できたガラスのかたちに関心を持っている。さらに、ガラス素材を用いて、身の回りに存在するものや風景などに対する印象や感覚、記憶に基づき、とらえることができない瞬間などを見る時生まれる自身の心像風景を表現している。本論文では、様々な偶然性の中から、「割れ」というガラス素材だからこそできる現象に注目した経緯と、素材の可能性と「割れ」の芸術表現について考察し、筆者制作の世界観と作品について述べる。

筆者がガラス素材を用いて制作する理由は、焼成過程において発生する偶然できたガラスの表情に惹かれたからである。その表情を作品の中に取り入れるためには、ガラスに対する認知及び起こり得る偶発現象の把握が不可欠である。キルンワークという技法は、電気窯にガラスの入った型を入れ、加熱することにより成形する技法である。窯の中で焼成している間は、ガラスは作家の意図とは関係なく、溶解、膨張、収縮といった働きをし、ガラス自らが様々な形を生み出す。この素材が作り出した自然のかたちは力強さを持ち、鑑賞者や制作者である自身の心にも何か訴えかけているような感覚になる。

本論文はガラスの焼成過程に発生する様々な偶然性の中で、「割れ」という現象を中心に述べる。日常生活の中で、ガラスといえば割れやすい印象がある。割れることは危険が伴うと同時に価値を失うという考えを持つ人が多い。ガラス工芸においても、割れることはデメリットと認識することが多い。しかしその一方で昔から陶芸やガラス分野は割れた表情を使う貫入や呼継、アイスクラックなどの技法がある。現代アートにおいても、ガラス素材の割れる表情を使う作品も多くあり、筆者にとっても、「割れ」はガラス素材だからこそ持つ表現の一つだと考えている。このような背景をもとに、本論では「割れ」の芸術的な表現を探すと同時に、ガラス素材の新たな表現を探した。また、ガラスの「割れ」から感じた「不完全の美」や「無常感」が本論のタイトルである「架空のものそして風景」という筆者の制作のテーマに与えた大きな影響について述べる。

本論文の構成は以下の通りである。

第一章では、ガラス素材の歴史や技法、特性、美術領域での応用、筆者が研究している技法およびガラスの焼成過程で発生する偶然性について述べる。第一節では、異なる芸術分野においてガラスの様々な表現について述べる。第二節はキルンワーク技法を中心に、筆者が研究している独自性を持つ技法について、自身の作品或いは他者による作品を例に挙げて説明する。第三節では、ガラスが焼成する過程に起こる偶然性について考察する。

第二章では、ガラスの割れと造形の関係性について述べる。焼成中に発生した様々な偶然性の中で、最も興味深いのが「割れ」である。第二章は「割れ」というガラス工芸では一般的にデメリットだと思われることに対する自身の理解及び「割れ」のような不完全さから感じた美意識について言及し、昔から「割れ」の表現を応用した技法と歴史的な作品を例に挙げ、「割れ」の様々な表現について述べる。

第三章では、自身の制作テーマによる作品から、日常の物や風景を観察する行為による創造する架空の世界観の表現について記す、ガラス素材を媒体として自己と身の回りに存在する物との間で最も本源的なつながりを論じた。そして過去作品と提出作品に「割れ」の表現を応用したことについて考察する。第一節では、筆者の制作において観察と制作の関係や認識、記憶とイメージの再構築という自身の制作論について考察する。第二節では、筆者の過去制作した「海」、「影」、「雲」三つの作品を例に挙げ、筆者の制作の世界観の形成及び現在の制作テーマに変遷する経緯について論じる。第三節では提出作品について述べる。

終章ではパート・ド・ヴェールと発泡鋳造二つの技法を応用することで、或いは過去作品が「割れ」の表現を応用した経験により、「割れ」による造形について思考し、新たな芸術表現を生み出した。また、「架空の物そして風景」をテーマとした作品とガラスの「割れ」の表現の関係性を検証した。